

さくら湯

古風であり、優雅であり、また数百年の復活と再創造の歴史を持つ公衆浴場さくら湯は、多くの点で、山鹿の核であると考えることができる。入浴客は、まず自動販売機で入場券を購入してから、アルカリ泉質で入浴後の肌を絹のようにすべすべにする温泉に浸かる。

江戸時代における素晴らしい由来

肥後藩（現在の熊本県）の大名藩主であった細川忠利（1586-1641）が山鹿温泉を大変気に入り、1640年、現在さくら湯がある場所に「お茶屋」を造った。江戸時代（1603-1867）の「お茶屋」は、支配階級のみサービス提供を行う一種の娯楽施設・場所であった。18世紀まで、山鹿のこの地域では、低い階級でも利用することができたものを含み、数か所の温泉宿が営業されていた。江戸時代の終わりに出版された名温泉全国大要録に山鹿温泉も掲載されており、今日のさくら湯に受け継がれた温泉水が長きにわたって評判が良いことが分かる。

公衆浴場の復活

細川家「茶屋」は、1868年の明治維新後に姿を変えた。徳川幕府が終焉し、天皇に主権が回復された。その後、行政改革が広がりを見せると、大名藩主は自らの領土を手放さなければならなくなった。地元の名士である江上津直（1827-1905）と井上甚十郎（1833-1906）は、「お茶屋」を町中の住民すべてが楽しむことができるよう公衆浴場に改造するために多額の寄付をすることに決めた。1872年に現在の形のさくら湯が生まれ、続く数十年間にさらなる拡張や改修が行われた。

変わりゆく運命

すべての家庭にお風呂が備わっていなかった19世紀終わりから20世紀半ばにかけて、さくら湯は絶大な人気を誇っていた。昭和時代（1926-1989）の最盛期で、1日あたり4,500人の入浴客を収容した。1970年代になると、さくら湯の周辺で大規模な再開発が行われ、さくら湯は現代風に再建築された。

1990年代における八千代座の復興が刺激となり、地域住民はさくら湯をその伝統的な木造建造物に復元させようと思うようになった。設計者らは写真やその他の資料を参考にし、元のさくら湯の縮尺模型も活用し、忠実に建物を再創造した。そして、さくら湯は2012年に再開した。

今日では、さくら湯は九州最大級の木造温泉施設となっている。山鹿とさくら湯の歴史に関する資料の現地アーカイブが存在する。さくら湯の江戸式建築と雰囲気、山鹿の住民が自分たちの歴史と地元文化に関して持っている深い敬意を表している。